

〔第 363 回〕 研究例会報告

日 時：2020 年 12 月 13 日（日）14：00～16：00

テーマ：司書課程におけるルーブリックの活用：学生の自己評価による学修効果

発表者：川崎千加（大阪女学院大学・大阪女学院短期大学）

参加者：26 名（Zoom 開催）

本発表では N 大学司書課程において、司書課程の学びによって何ができるようになるのか、司書に求められることは何かをルーブリック (rubric) の形で提示し、履修学生自身が各自の学びの到達点を自己評価できるようにした試みについて述べた。

日本の高等教育におけるルーブリックの開発は、2012 年 8 月の中教審答申において、学修成果の具体的評価方法の 1 つとしてあげられ普及してきた。ルーブリックは評価項目と評価の基準を具体的に記述した表であり、医薬系、教育学系を中心に様々なものが開発されてきている。

N 大学で作成したルーブリックは大学の教育理念も踏まえ、司書課程科目全体を通してどのようなスキルや知識を身に着けた学生を育てるのかを、学修者と教員が共有するとともに、大学全体にも明示するものとした。ルーブリックによって司書課程を履修した学生が、どのような人格としての司書になってほしいかを具体的に示すことにより、科目間の連動性を意識することができ、学修目標を明確にすることが学びへの動機づけにつながると考えた。

N 大学のルーブリックは、以下の 5 項目を評価指標とした。1. 情報社会において必要な基本的 ICT スキルを身につけている。2. 情報サービス専門職として多様なメディアの特性を理解し、客観的な情報に基づく意思決定、情報の発信ができる。3. 社会的な変化に関心を持ち、多面的に物事を捉え、考えることができる。4. 司書の仕事において求められる、対人スキルとして他者への共感性、奉仕の精神を持っている。5. 図書館が人々の知る自由を保障する社会的基盤であることを認識し、図書館の発展に寄与する。それぞれ達成度 1～2 点、3～4 点と 5 点の基準を設け、指標ごとの評価項目を記述した。これを学生には年度はじめの司書課程のガイダンスで配布し、各授業オリエンテーションで紹介するとともに、非常勤講師にも配布した。

このルーブリックを活用し学生に自身の到達度を

自己評価してもらった結果について報告した。自己評価はポートフォリオの 1 つである manaba folio のレポート機能を使用した Web アンケートによって実施した。回答数は 80 人で回答率は全体で 45%であった。自己評価アンケートでは、どの程度自身が到達していると思うかを 5 段階で評価してもらい、指標毎に列挙した目標の中でまだ不十分と思える項目を上げてもらった。

学年が上がるにつれ履修済みの科目も増えるため、3～5 点の評価が増え、履修段階を踏まえた学びによる成長がうかがえた。最も自己評価の平均点が低かったのは指標 2 で次いで、指標 5 となった。最も平均点が高かったのは指標 4 で全学年共通だった。2 位以下では平均点の順位は学年毎で若干の違いが見られた。自由記述では、“まだまだ学ぶべきことが沢山あると感じたので、授業にもしっかき取り組みたい”などの、学修への動機づけが見られるコメントが多くみられ、自身にどんなスキルや知識が足りていないかが確認できる機会となったことが述べられた。また 4 年生では具体的に司書としての専門性を意識したコメントが多く見られた。

N 大学で実施したルーブリックによる学修到達度の試みによって、司書課程での教育・学修を大学の教育理念やディプロマポリシーと関連づけることで、各大学で特徴的な司書像が描けるのではないかと考えられた。ルーブリックの作成によって、大学内での司書課程の質保障の説明材料となり、学生が何を学び、どんなスキルや知識を身に付けることができるかを学生自身が明確化 (メタ認知) できることで、学修の動機づけにつながることが確認できた。さらに、司書課程担当者間でルーブリックを共有することによって、教育者間のコンセンサス作りに役立ち教育理念の共有化に繋がると考えられた。

(文責：川崎 千加 大阪女学院大学・
大阪女学院短期大学)